

---

# 歌の力～混沌に咲く絆（はな）～

洒落頭社

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

歌の力～混沌に咲く絆～

### 【ZPDF】

Z9099W

### 【作者名】

洒落頭社

### 【あらすじ】

特殊な血統により、特殊な力を使える家族がいた。

それは歌うことで、そこに込められた詞を現実世界に反映できるといふもの。

それはとても素敵な とても危うい異能。

これは歌を巡る家族の、葛藤や衝突、そして絆を綴った物語である。

## 登場人物紹介

物語の第16部分までで、登場人物が出揃つたので、紹介しておこうと思います。

またこの情報は、話が進み次第、隨時更新していきます。

なお、未読の方は、ネタバレが多分に含むことを理解した上でお読みください。

後、記述の都合上、第16部まで触れられてない内容もちょこつと述べます。

なので、読んだ方にも若干のネタバレがあることを予め「」承ください（第16部まで読んでくださった方にとっては、そこまで問題はありませんが、ネタバレなんて嫌だ！ という方は読まないことを推奨します）。

### 登場人物紹介

#### 加籠夏華：

本作の主人公であり美少女。愛称は、「夏」。

潔癖症でやることなすこと、完璧にこなさなくちゃ我慢ならない性格。なのでバラバラになった今の家族に、多大な不満を抱いている。兄には秘密にしているが、禁じられた異能の力（歌うことで、そこに入れられた詞を現実に反映させられる力）を使い、東京スカイツリーを崩落させた張本人でもある。

加藤冬治：  
かとうとうじ：

夏華の兄。妹とは違い、豪快な性格で、一家の長として家族を支えている。

また、家族のことを一番に考えすぎるせいで、自分のことを等閑にしやすい。それ故、美男イケメンでありながらに、女性にフられることが多いある。

過去に、歌に関わる仕事をやっていた形跡あり。

加藤千己：  
かとうちいじ：

夏華の弟であり、冬治の弟もある。つまりは末っ子故、甘やかされて育てられてきた。

その反動なのか、結果なのか、どうすれば怒られないかをよく知っている。

また、ゲームや漫画といった、一次元のものを愛する厨クー病な少年。それが災いして、身内によく迷惑をかけてくる。

ただ、それが高じて、機械関係にはめっぽう強い。

戸籍上、夏華や冬治とは血縁関係があることになつてゐるが、実際に血の繋がりはない。

従つて、千己にとって夏華は義姉にあたり、冬治は義兄にあたる。

加藤美麗：  
かとうみれい：

夏華の姉にして、暴力団組織 **白道会** の会長。  
はくどうかい

非常に頭の回る性格で、人を出し抜くことに長けている。  
戸籍上、夏華や冬治とは血縁関係があることになつてゐるが、實際には血の繋がりはない。

従つて、美麗にとつて夏華は義妹にあたり、冬治は義兄にあたる。  
ただ、千己とは血が繋がつており、実姉である。

かどうはな  
華道花：

夏華と冬治の実母にして、東関東最大の暴力団組織 **華道会** の会長。  
かどうかい

かんどう  
近藤：

東関東最大の暴力団組織 **華道会** の若頭。つまり、組織における  
ナンバー2の実力者にあたる。

## 登場人物紹介（後書き）

舞台設定（華道会や白道会など）については、後日追記します。

## 舞台設定

今度は舞台設定について、詳細を記述していきます（あくまで第16部分までです）。

物語が進むにつれ、こちらも更新していきます。  
以下、ネタバレを含みます。

載せてる第1-6部まで読み切つてない方は、そのことを予めご了承ください。

また、記述の都合上、第1-6部まで触れてない所もちょこっと出てきます。

読まれる方は、そのことも予めご了承ください。

### 舞台設定

かとうかい  
華道会：

東関東最大の暴力団組織。

はくどうかい  
白道会：

東京都心に拠点を置く、一暴力団組織。

華道会との対決姿勢を鮮明に出してる、数少ない組織もある。

先の東京スカイツリー崩落事件で、犠牲になったのが同組員だったこともあり、現在は騒然としている。

歌族かぞく：  
：

古くから華道家に脈々と受け継がれる、特殊な血統を持つ家系のこと。それは歌うことで、そこに込められた詞を現実に反映させられるという、異能が揮える家族だった。

現状、この力を使えるのは、華道会の会長かとうはな 華道花かとうはなと、その息子の冬治とうや、他には夏華なつかの三人だけである。

ただ、二〇歳はたちまでは、歌うことは厳禁とする掟いのちがある為、夏華はしてはいけないことになっていた。

申刻さるときの縛ばく：

詳細は、今の所不明。

## 序章 勧善懲悪【東京スカイツリー】（前書き）

初めまして、読者様！

この度、「小説家になろう」に初投稿いたしました。  
何分、若輩者でドキドキですが、今作に少しでも付き合ってくれば、幸いです。

まだ序章だけですが、一週間に一～四回は更新していくことを思つております（できるかな～）。

途中までも結構ですので、ぜひ何らかの形で感想を頂ければ至上の喜びです（忌憚ない））意見、お待ちしております！）。

## 序章 勧善懲悪【東京スカイツリー】

序章 勧善懲悪

某日 深夜 東京スカイツリー外縁

その日、携帯 タッチパネル式の液晶画面が、持ち主を死に追いやっていた。

その男は、真冬だというのに玉の汗をかいている。かけ上がる度、その雲が階下に落ちていった。力む両足は震え、足元が覚束ない。それでも、逃げるのをやめはしない。

思わずのけ反るほど、吹きつける強風が男の進行を妨げた。踏ん張りを利かせようするが、よろめいてしまう。何度も、落ちる！？ と思つたことだらう。もし手すりが無かつたらと、考へる度ゾッとする。

この階段は、螺旋構造だつた。巨大な電波塔を、ぐるぐる巻きに何周も回つてできている。その建物の高さは六三四メートル。つまり、足で上るのは考えられない高さだつた。なのに男は駆け上がる。なのに男は上つていく。その無謀とも言える高度を。

理由は決まつていた。ここからなら、死ねるからだ。現に男は自殺すべく自殺できる高さまで向い、そこでお終りにしようと思つていた。

なのにできない。できなかつた。恐くて……たまらなかつた。

何度も覚悟はした。諦めもした。けれどもそれ以上に、生きたかった。それだけのこと。それだけのことで、ほんのわずかな奇跡に縋る。

気づけば長時間かけ、到達する。てっぺん 展望室前へと。

同時に男は、うつ伏せで崩れ落ち、倒れこんだ。その拍子に顔を打ち、目眩を起こす。肩で息をしていた。吐く息は白い靄となつて左右に四散し、倦げに消えていく。突つ伏した背中からは、湯気がゆらゆら立ち上っていた。ふくらはぎはパンパンに膨れ上がり、足裏には激痛が走っている。一休みしたことで氣づかされる、疲労困ぱい。もう一步も動けそうにない。痛い。痛くてたまらない。

もう後はここでじつとしていれば、何とかなるんじゃないだろうか？

それ以前に、持つてゐる携帯を空に投げ捨てれば、この状況から救われるのでは？

（どうして……どうして……）

男には分かっていた。その何れの問いかけも、こちらの願望でしかないことを。

（何で俺が……俺が一体何したっていうんだ……）

ふらついた足取りで、何とか手を付き、立ち上がる。再度、痛みが走つた。堪えきれず倒れそうになつた所を、何かに支えられる。扉だ。

そのドアノブを回そうとする。が、涙のせいで、うまく取つ手を掴めない。やおら乱暴に扱い、思い切り引つ張つた。すると、開くはずの扉がガチリと、鈍い金属音を響かせ止まつた。

そこには、鍵がかけられていた。扉の上部には『スタッフ専用出入口』と、そう言付けがされている。

男は着こなした警備服、その胸ポケットに手を入れ、鍵を取り出す。胸元には、かけられた名札があるが、そこに男の本名は無い。つまりは、偽名。

男は扉の鍵を開け、中へと入つたのだった。

内部の光景は真つ暗の一言で、『非常口』と書かれた四角、その

緑だけが淡い光を放つていて。加えて、営業時間外ならではの静けさ。さつきまでが強風の音やら、甲高い足音やらで騒がしかつた分、より際立つて感じられた。

暗闇と沈黙の中、男は徐々に落ちつきを取り戻していく。余計な汗を手で拭い、被っていた帽子を取つた。

顕わになつた顔面は、とても警備員向きではなかつた。強面で厳しい、中年男性。明らかに極道を踏んだ過去のある顔つきである。

男は、恐る恐るといった感じで、今度はズボンのポケットに手を入れた。感じたのは、過度の熱さ。その熱源を震えながらも驚掴むと、外に取り出す。

それは最新の、タッチパネル式の携帯電話だつた。

そして、薄目ながら見た液晶画面は、真っ黒だつた。

「は……ははは」

電源が勝手に落ちていた。つまりは、バッテリー切れ。だから、もつお終い。助かったのだ。

チャリラリラーン

「！」

その時、儂い願望を打ち碎く、絶望の旋律イントロが奏でられる。場違いに陽気な、だからこそ不気味なサウンド。音源は電源を切つたはずの、この建物内のスピーカーから。最大限まで、音量ボリュームが引き上げられている。

「ひぎいつー？」

まだ何もされてないというのに、された後のようない奇声を上げる男。経験からくる、条件反射のようなものだった。

散々に打ちのめされてきたのだ。この、詞うたに。

それは音痴な歌声　あんまりな女声ナヅカだつた。

？始まりの歌　五線譜じや伝わらない　十八番

でかけましょう　世界を君色に塗り変えてこう？

Aメロが、男を発狂させる。

?でかけましょ?で、何故か自身の体が浮き上がり、横へなぎ飛ばされる。窓をかち割り、夜空へと。

粉々のガラス片と共に、闇に投げ出された男は、血まみれだつた。肌に刻まれた切り傷、そこから零れる生血より早く、この身は落ちてゆく。

凄まじい速度に、荒れ狂う風。体は否応なく振り回される。まるで糸の切れた人形の如く、為すすべなく踊らされた。

冬空に、揺らめく人体が映えていく。

が、これで終わりではなかつた。

再び、男は建物に引き寄せられる。重力を無視した、圧倒的な引力。

同じように窓をかち割り、中へと転がされた。飛び散るガラス片が、その勢いの凄惨を物語つている。転がつて落ちた男は、その先で深い血溜まりを作つていた。

ここはさつきまでいた第一展望台でなく、その下部にあたる第一展望台。その、無音の空間では、荒々しい息遣いだけが反響していた。

「うあ……くつ……」

呻き声は意味をなさない。伝わるのは、どうしようもない悲哀。苦渋の語感に包まれていた。

(どうして……どうして……)

叫びたい。喚きたい。けれども口が、動かなかつた。ただ熱い。唇だけじゃない。顔も首も胸も腰も足も。熱い。熱くてたまらない。微動だにしない、うつ伏せの五体。その壊れた瞳は、ある文明の利器を見つめていた。

携帯電話。その持ち主と同じく、傷だらけの。

もう動かないと見られる、そんな傷物の画面を見るにつけ、男は

目を疑つた。

(光つてる?)

電源が入れられたのだ。バツテリー切れの携帯に。ありえない現実に、ありえないこの仕打ち。

「たとへたとたと」

喉の奥からくづくづと、苦しそうな引き笑いをする。それは、さきほどの安堵からくる笑いとは全くの別物。死を悟った人間が最後に見せる、あの世への笑みに近いものがあつた。異なる点があるとすればそれは、男が泣き笑いしてゐるということ。足搔くことを諦め、それでも生きたいと思つてしまつてゐる。願つてしまつのだ。そんな、板ばさみの自嘲。どうしようもなく切ない、生死の葛藤がそこにはある。

(これも  
詞があれ  
がやつたんだ)

間違いない。この携帯の非現実さは、Bメロが起こしている。そして、その画面には身の毛もよだつ四文字が並べ立てられていた。

サビが歌い終わると同時に、横一線の何かが、男の目線を横切つた。響くのはキー<sup>ン</sup>という耳鳴り。

そして、日本最大の電波塔は真っ二つに裂けた。

出来上がったのは台形と、地に突き刺さる逆三角形。非現実的な光景がまた一つ、都会の夜景に映えていったのだった。

**序章 勧善懲惡【東京スカイツリー】（後書き）**

次回作は、明日を予定しております。

## 序章 勧善懲悪【テレビ中継】（前書き）

今回は、視点が警備員からある人物へ。  
実はこの人物こそ本作の……

## 序章 勧善懲悪【テレビ中継】

『たった今緊急速報が入りました！ 東京都墨田区押上にある日本最大の電波塔、東京スカイツリーが真つ一つに切り離され、その上部にあたる先端が、六号向島線の路面に突き刺さっているとのこと！ 繰り返します。たった今』

部屋にあるテレビ、その画面内では、『緊急速報』とのテロップと共に忙しなく番組が変更されていく。

女は、手に取ったリモコンをその騒がしさに合わせ、チャンネルを変えた。が、ある局では生中継を、また他局ではその道の専門家を招いての実況見分をと、やつてゐることは変わらない。

どこもかしこも、うるさい。女は、その元凶にチャンネルを合わすと、終に電源を落としたのだった。その後、ため息をつく。

吐息で震えた唇には、艶やかな紅のルージュが塗られていた。靡く黒髪に、ファンデーションやらマスカラやらで整えられた顔つき。齡の割には背伸びした、そんな色香を漂わせていた。

チャリラリラーン

馴染みの着メロ（イントロ）が聞こえる。それは、大好きな人の歌。

女は携帯を手に取ると、通話ボタンをプッシュする。その後、それを耳に当て、声を発する。「もしもし」でない第一声を。

「説明はいらない。もひ、ニュースで知った」

と結論だけを告げる。相手からの音声はない。沈黙が、場を支配した。

ややもして、プツツという音が聞こえる。電話が切れたのだろう。

「これで……やつと始められる」

女は徐に立ち上ると、扉を開け、風呂場へと向った。その後、

脱衣所にて洋服を脱ぎ、装飾品を外して生まれたままの姿になる。

その裸は、玉肌だつた。まるで女神の彫刻を思わせるかのよう、均整の取れた美。女性の象徴でもある一つのふくらみは、申し分ないおやかさだつた。

女は風呂場の電気をつけ、その中へと入る。次にカラコンを回し、シャワーを浴びた。その際、思わず口づさまれた鼻歌。

その声色は、あの東京スカイツリー内で響いた音痴なたてものあんまりな女声そのものだつた。

ややもして、女は風呂から上がると、寝支度に入る。持つてきたタオルケットを手に取り、まずは体を拭いていった。すぐそばには、洗面所。

女は桃色の可愛らしいネグリジェに着替えると、今度はそこで濡れた長髪を乾かす。芳香性の強いシャンプーを使つてゐるせいか、ドライヤーの風と共に、椿の香りが鼻腔をくすぐつた。鏡に映る風呂上がりの、くつたりした顔。そこには、妙な艶つぽさが醸しだされていた。

そうして髪を乾かしきつたら、後にやるのは決まりないと。歯を磨き口を濯ぐ。ただそれだけ。

口内をすつきりさせると、女は床につくべく、自分の部屋に戻つた。薄暗く、冷えた廊下を歩きながらも、手持ちの保湿用クリームを肌にこすりつける。感じるのはヌルツとした感触と、ヒヤツとした冷たさ。辺りがぼんやりしてるので分からぬが、きっと光沢ある、てかてかの肌になつてゐることであつた。

そんな、何でもないことを思つてゐる最中、異変は起つた。どこからか声が漏れ聞こえてきたのだ。それ

それは、女性の色っぽい嬌声。音源は自分の部屋のすぐ隣。もつと正確を期せば、そこにあるもう一つの部屋、その扉を隔てて向こう側から。

いつものことだった。

なので女は気にせず、自分の部屋への扉を開ける。重い足取りそのままに、ベッドに腰をかけると、枕元に置かれた携帯 タッチパネル式の液晶画面を操作した。そこでやるのは、決まりのこと。朝の目覚まし、アラームの設定だった。

一通りすべきことを終わらせると、つけっ放しだった電気を消す。と同時に、暗闇が部屋中を満たした。女は慣れた足取りで、布団へと入る。

布団に包まれた、温いベッドの中。

なのに、女は寒かった。真冬だからではない。無論、季節ならではの寒さに両手両足を冷えきっている。すぐには寝つけそうにない。両耳が冷たく、思わず顔まで掛け布団を引き上げてしまつ。が、そうではない。問題は、その寒さではないのだ。

悪寒。

実の所、女が苛まれてるのは、この類の寒さだった。

( とうとう、やったんだ )

静寂の中、とうとう今日のことが反省されてしまつ。見て見ぬふりなど、できようがなかつたのだ。

遂に、罪を犯した。取り返しのつかない大罪。

背負つたものの重たさに、心が押しつぶされそうになる。知らず震える手で、震える自身を抱きこむ。

それでも、やめない。やめてはけない。

必要だからだ。必要悪。

それでも、けれども、

( ..... 苦しい )

女は胸に手を当て、目一杯握り締める。掴まれた、何でもない痛みに泣きそだつた。堪らずベッドの端、そこにぴつたりとくつかけられた壁へと、体をすり寄せる。その壁を隔てた向こう側には、さつき聞いた嬌声が、今もなお鳴り響いていた。

「 ..... 」

皿をつぶり、耳を済ませる」として聞こえる、もう一つの声色。

それは、大好きな兄の声。

その声が聞けただけで、女には十分だつた。彼がいる。それはもう、どうしようもない安心感だった。悪寒も、痛みも、罪も、その重みも、その全てから、守られる。守ってくれるという絶対的な関係。それが、この家族のあり方。

とはいって、この冷え冷えの体感である。すぐには寝つけない。まどろみに落ちゆくまでの数十分。もどかしくはあった。寒氣もした。それでも、

「…………」

やせつけなど、何一つとしてなかつたのであった。

## 序章 勸善懲惡【トラン中継】（後書き）

次回作は、明日投稿しようと思つてます。どうぞよろしくお願いします。

## 第一章 不確かなる真実（うた）【始まりの朝】（前書き）

物語の始まり。さつき罪を犯した女性が実は……

## 第一章 不確かなる眞実（うた）【始まりの朝】

朝っぱらから、それは起こつた。

目覚ましのアラーム その着メロが、頭にガツンと響いてくる。すかさずピッと、それを一音で止めた。動きに無駄がない、一瞬の出来事。必要最低限の情報で、事なきを終えるあたり、その潔癖さが垣間見える。

と、いうより、女はそもそもが潔癖症だった。それも極度の。本人はそれほどでないと思つてゐるが、周りから言わせるとどうだつた。

「うーん」

氣だるそうに上体を上げると、眠氣眼をいくらかこする。愛らしいその仕草は、男性陣が色めき立ちそうな可憐さが窺える。女は、こすつていた手を持ち上げると、ゆっくり背伸びをした。気持ちよさに、変なヘタレ声を上げてしまつ。

「ふわああ」

自然とでる大きなあぐび。その開かれた大口を、女は咄嗟に手で隠す。恥じらいは、どんな時でも忘れない。

起き上がるとベッドを這い出し、窓側に向かつた。

後、カーテンを掴むと、横に押し広げる。当然の如く、部屋に差し込む陽光。覚悟してたものの、眩しさに目はしばたたかれる。けれども、おかげで室内が明るくなつた。カーペットでは所々に陽だまりが、揺れてはたゆたつてゐる。

「…………よし！」

女は気合を入れた。それは別に、これから今日も頑張るぞ、といふような呑気なものではなく、自己暗示のようなもの。自分に言い聞かせてゐるのだ。なぜなら、ここからは別人になるのだから。罪を犯した女ではなく、一家族の妹 加藤夏華かとうなつかとして。

夏華はこれから会おうとする人に、話せないでいたのだった。自

分が、罪人であることを。

だから演じなければいけない。こなさなければいけない。いつも通りを。これまでもそれで通してきた。だから大丈夫。

夏華は一度、両頬をぱんと叩くと扉に向かつた。ためらいなく、その取つ手を掴み、捻ると押し開ける。勢いで廊下を半円に回ると、すぐ隣の扉を先と同じく押し開ける。

そして、機械的に開けた先　ベッドには、裸の一人が寝そべっていたのだつた。

加えて、カーテンの隙間からの木漏れ日が、川の字の一人を照らしている。つんと鼻をつくのは、雄雌の動物的な匂い。劣情の余韻からくるそれは、まぐわいあってこそ、そんな情景で満たされたいた。

いつものこと。

毎度のことなので驚きもしない。初見ではさすがに、とんでもな反応をしてしまつたが、もう慣れてしまつた。

最初にこれを目にしたのはそつ、中学一年生の夏、八月一四日の一二三時一〇分、一階の居間でであつた。喉が渴いたと思って起きてしまつたのが、運の尽き。当時、思春期真っ盛りの夏華にとつて、その情景は衝撃的だつたしかいいようがない。顔を赤らめ「う、ご「ご」めんなひやいつ！」なんて言つてた初心な自分がそこにはあつた。

とはいゝ、今ではもう高校生のご身分。あの時のこととは人生の恥ずかしい汚点として、懐かしむ程度のものになつていた。

相手の女性は、初めて見る顔だつた。齡は、一〇代後半くらい。セミロングの髪を少しカールさせることで、愛らしさを演出している。それは強氣で、どちらかといふと男勝りな顔つきとはギャップがあり、だからこそ魅力的だつた。細身の体にはシミ一つなく、す

うとした脚には、自然と目がいってしまつ美しさがある。

可愛いというよりは格好いい。

可愛いというよりは綺麗。

女っぽいというよりは男っぽい。

実の所、兄が付き合つ女性は皆、この三条件に当てはまる人ばかりであった。

（これで何十人目、いや、もう一〇〇人は超えてるのかな？）  
もうこの女性で何人目になるか、分からぬ。そのくらいに遊び人な彼。

夏華は、その家族に第一声を発する。朝の挨拶を。

「おはようござります、兄さん…………冬治兄さん！」

その一声に兄 加藤冬治は、案の定起きやしない。三〇代そのままに、豪快ないびきをしていた。暑苦しくない程度の短髪に、精悍な顔立ち。腹筋は割れ、とはいえたマッチョとは違う、いわゆる女性好みの筋肉美を備えた体つきだった。イケメンという言葉がぴたりな、そんなビジュアル。兄妹揃つてのこの端整さは、遺伝故の、そんな生来のものがあった。

「起きてください。朝ですよ。起きてください」

一ワトリのようにベッドの周りを行つたり来たりし、同じ言葉を繰り返す。正直、肩を揺すれば起きるだろうが如何せん、今の兄は不潔だ。潔癖症の妹としては、触ることに比類なき抵抗を覚える。どうすべきかと悶々してゐる内、ふと視界の片隅に馴染みの物体をとらえた。

アコースティックギター。

弾き方など一切知らないが、これが楽器だといつことぐらいは分かる。つまり、音が鳴るもの。

夏華は、壁に立てかけられたその楽器のヘッドを掴むと、一気に一弦から六弦までかき鳴らした。

途端、ベッド上に一つの裸体が跳ね上がる。

「じつやう起きたよつだ。寝癖せ、改めて言い直す。  
「おせよハヤカワこそす、兄さん」

## 第一章 不確かなる真実（うた）【始まりの朝】（後書き）

次回作は明日を予定しております。

## 第一章 不確かなる眞実（うた）【兄妹で和氣藹々】（前書き）

兄妹揃つた朝。徐々に二人の仲が明らかになつて……

## 第一章 不確かなる眞実（うた）【兄妹で和氣藹々】

「何だ何だ何だ何だ！？」

と、騒ぐ兄。さすが音楽に関しては、反応の早いこと。一方、相手方の女性は、布団を引き寄せては体を隠していた。

どちらも、一ちらに気づいてる様子はない。なので身を乗り出し、顔を見せてみた。満面の笑みを。

「朝ですよ。起きてください」

「あれ、夏？ お前どうして」

夏華を「夏」の愛称で呼ぶ、冬治。疑問に思うのも無理はない。だって、彼の中で妹は今、友達の家でお泊りなのだから。

「さつき帰ってきたばかりなんです」

夏華は口<sup>こ</sup>もらず、平然と言つてのける。真つ赤な嘘だった。

「そつかあ……朝ごはんは？」

と喋る冬治は気だるそつだった。寝癖がついたままの頭を搔いている。

「食べてません」

「ん。分かった。ちと下で待つてろ。すぐ用意する」

必要最低限の情報を交わすと、夏華は向きを翻した。廊下へと。

一瞬、相手方の女性と目が合つた。合わせるつもりはなかつたのだが、あまりにもこっちを見るものだから、罪悪感に駆られてしまつた。きっと彼女からすれば、「この子、妹さん？」からの「どうも初めまして」を言いたいのだろう。これまで幾度となく繰り返されてきたのだ。それくらいは分かる。

とはいえる、夏華は会釈も挨拶もしなかつた。それは、別に兄妹愛とか家族愛とかそういう感情からではない。単純に憐れみから。どうせこの後、一分も持たず別れるのだ。変に情けをかけて縋られでもしたら、たまたまんじやない。

そんな予感に耽る背中 その背後に、致命的な一言が発せら

れた。

「とつあえずお前、もう帰れ」

それは冬治から恋人に向けた、明確な突き放し。彼の声色は粗雑で、何より冷ややかなものだった。

（はい修羅場確定）

夏華の逃げる足は、自然と早足になる。そのまま廊下に出ると一眼散に階下を手指した。途中、

「そんな言い方つてないじゃない！…」

怒声がこだました。パンツと、乾いた音も聞こえる。引っ越し始めたのだろう。思つた通りだつた。が、となるとこのままではまずい。夏華は階段を一段飛ばしで駆け下りると、リビングに滑り込んだ。すると、少しして後バタバタと、荒々しく階段を下りる音が鼓膜を揺らす。

少しして扉が開き、閉まる音がした。さつきの女性が帰つたのだ。あの早さからいって、着の身着のまま。

「……ふう」

思わずホッとする夏華。毎度のことだが、この一時はいつになつても慣れるものじゃない。痴情のもつれが、どんな歳でも起つること同じく、男女関係というのはかくもハラハラさせられるものだった。

何分か経つて後、派手なトランクス一丁の冬治が、体を引きずらせながらも一階から下りてくる。左頬には立派な紅葉てがたが、赤く色づいていた。

「これまた、思いきり引っ叩かれましたねえ。差し詰めBパターン？」

「Bパターン？ なんだそりや」

朝っぱらからビンタを受けた男らしく、冬治は不機嫌そうにリングに入つてくる。そのままの足取りで、夏華を横切り、奥の台所

へと進んだ。その際、なんてことない仕草で妹の頭を撫でる兄。

「これまで兄さんがフられてきた過程を、五つに分類してみたんです。Bパターンは暴力沙汰。ちなみにAパターンは自然消滅でCパターンは」

「はいはい分かつた分かつた。それより、顔洗つてうがいしてきな」  
「こちらの長けた分析力を無碍にする、冬治。彼は台所で、料理の下ごしらえをしている。

一方、夏華も台所までついてきていた。そして、兄を手でしつしと、どけの合図を送つて脇に寄せさせる。水場に独占市場を築いた夏華は、悠々とカラランを捻つて水を出した。

「分かつてます。だからついてきたんじやないですか」

「はあ？ だつたら早く洗面所に」

そう喋る冬治の言葉が途切れる。彼の視線は、妹に釘付けだつた。かくいう夏華はといふと身を乗り出し、その迸る水に横から口を差し込む。

うがいしていた。

すかさず兄が、そのカラランを全開にする。

「あばばばばばっ！？」

口内に尋常でない水量が注ぎ込まれ、夏華は悶絶する。軽く溺れていた。鼻の奥にまで水が這い上がりてきて、顔を泣きつ面にさせた。

「何でことするんですか兄さん！？」

「バカか、お前は。コップも使わずに直になんて」

「バカなのはそっちの方です！ 知つてます？ コップ一つとつてみても塵や埃、果てにはばい菌なんものがウジャウジャと」

「んなの、一回洗えば済む話じゃねえか」

「んなの、いちこちやつてたら面倒くさいじゃないですか」

「お前……」

冬治は痛い子を見る目で、こちらを咎める。が、夏華は意にも介さなかつた。こういう性分である以上、むしろ彼の方が間違つてゐる。

とすら思つてゐる。

「とりあえずお前、やるなら洗面所にしる。少なくとも、俺の見えない所で」

「何言つてゐんですか？」兄さん

「ん？」

「あつちだと蛇口と洗面器の間が狭すぎて、顔が入れにくいんです。その点、こゝだと広いじゃないですか。といつて、でなきやこゝまで来るなんで非効率的なことはしません。悪しからず」

言つて、カラソをさつきとは逆に回す。水の出を抑えると、髪をかき上げ身を乗り出し、进る水に横から口を差し込む。

改めて、うがいをした。

改めて、兄がそのカラソを全開にする。

「あばばばばばっ！？」

夏華は狭い立ち位置で、漫画ぱりに足をばたつかせる。さつきより水の勢いが強かつた。

「バカか、お前は」

「何がですか！」

「だから洗面所行けて」

狭い空間で、兄妹がささいな口喧嘩を繰り広げる。これまた、いつものこと。なので、決着がつくまでには時間がかかるであらうことを、夏華は覚悟せざるをえなかつたのだった。

## 第一章 不確かなる眞実（うた）【兄妹で和氣藹々】（後書き）

次回作は明日を予定しております。

## 第一章 不確かな真実（うた）【兄妹で和気藹々】（前書き）

落ち着いた二人は和やかに会話を……

## 第一章 不確かなる眞実（うた）【兄妹で和氣藹々】

洗顔と、うがいとを済ませた夏華は、身支度も終わらせていた。うつすらと分からぬ程度の薄化粧に、きちんとスカートの丈を守つた制服を着こなしている。見本の女子高生といつた所だ。ついでに黒フレームの眼鏡もかけてるものだから、その雰囲気はまさに優等生。

「早くしてください。今日は登校日なんですから」「わーってる。ちと待ってくれ」

台所の騒がしい油の音と共に、冬治の声が聞こえてくる。只今、料理中だ。とはいへ、作つてるのは朝食ではない。朝食は既に、テレビに並べられてる。今日の「」飯はチャーハン。お味噌汁の代わりには酸辣湯。おかずには餃子と……

（悪意だ。悪意が見える）

冬治にそんなつもりはない そう知つた上でも、夏華は疑つてしまつ。

この中華地獄は、妹に対する当てつけではないのか？

実は胃がもたれる女性に興奮を覚える、そんな家族に言えない悩みを抱えてるのではないか？

兄は中国人で……となると自分も中国人で、中華を食べさせることには、まだ日本人と自覚してる妹に対する、ある意味でのショック療法なのか？

男という生き物は、そもそも中華しか作れないようにできるのではないか？

頭を巡る雑多な問いかけは、後になる度、おかしなことになつていぐ。とにもかくにも、言えることがあるとすれば一つ。それはつまり、救いようのない悲劇だということ。

過去に一度だけ、夏華は「中華なんてもう懲りごりです…」をござり押ししたことがある。案の定、兄とは大喧嘩になつたが、こちら

としても色々な意味で引けなかつた時期だつたのだ。

そうして次の日、学校の楽しいお昼時間にて、開かれた弁当箱。中身は純和風だつた。おにぎりが三つ。ただそれだけ。たくわんすら添えられてない。それで十分だつた。

この一時、夏華は人目も憚らず涙した。あの感動は、あの感激は、時が経つても忘れられるものではない。その気持ちは收拾がつかず、今でもコンビニのおにぎりを見る度、胸を詰ませてゐる。それくらいに、衝撃的な一幕。だから、この時は思いもしなかつたのだ。終わりが、もうすぐそこまで来ていることを。

それは、食べた時にやつてきた。おにぎりのタネ　　具材は、酢豚だつたのだ。

当時、料理のレパートリーが少なかつた冬治は、三つしか作れなかつた。酢豚、チャーハン、そしてラーメン。不幸なのは、夏華がそれを知つてしまつてゐるところ。加えて、弁当箱には、おにぎりが三つ。

夏華の目が眩んだ瞳が、急激に冷静さを取り戻していく。すると、どうだらう。三つの三角の内一つだけ、明らかに萎びた、むしろビチャビチャなソレがあつた。所々原型が崩れ、米粒の隙間からは二ユル二ユルの

「ひいつ！？」

「どうした？　何か悲鳴みたいのが聞こえたけど……それより、ほら」

こちらが心の傷を回想をしてゐる内に、どうやら冬治は料理を作り終えようだ。テーブルに置かれる、三つの箱物。一つは白色、一つは紺色、最後の一つは赤色の風呂敷に包まれてゐる。お弁当だ。ちなみに、白の弁当箱は夏華のお昼用だ。

「今回もよろしく頼む」

「かしこまりました」

言つて夏華はわざとらしくかしこまる。よつやく、二人が食卓についた。

「ではでは……いただきます」

「いただきまーす」

お決まりの声をかけ合い、食事に入る。夏華は、事前に台所から持ち出したキッチンペーパーで、まずは油の吸い出しに終始したのだつた。

## 第一章 不確かなる真実（うた）【兄妹で和気藹々2】（後書き）

何だかんだで一日も待たず、投稿することができました。次回作は近日中を予定しております。

## 第一章 不確かなる眞実（うた）【兄妹で和氣藹々】（前書き）

兄妹喧嘩の余韻残る中、テレビではあの事件を取り上げていて……

「お前があ

その一言を皮切りに、冬治の説教が再び始められる。片や、夏華は「はいはーい」で受け流すと、雰囲気を和らげるべく、テーブルに置かれたりモコンを手に取つた。

- 10 -

空返事しながらに取り合わない。夏華は、ぱさぱさにしたチャーハンをレンゲで掬うと、かつこむ。ふわっと、芳ばしい香りと共に馴染みの薄味が口いっぱいに広がった。

丁度そこに、映像と音声が入ってくる。それは現場付近、その上空からのリポート。ヘリを利用しての実況中継だった。

「一つとなつてこます！ もうほんと建築関係の専門家にお話を伺つた所、このよつたな形での崩落は構造上ありえないとのこと… ならば、何故犯人はこのよつたなことができたのでしょうか？ 謎が深まるばかりです！ どうやつたらこんなことができるのか、また、誰が、何の為にこのよつたなことをしたのか… 今後警察の実況見分を待つて、明らかになるとと思われます！ こちから以上です！」

プロペラ音がけたたましいせいか、ナレーターの男は大声で、眼下に広がる景色を中継している。必死さと緊迫感がよく伝わってくる。スタジオへの返し方も上手で、ベテランの域を感じさせた。

一方、冬治はといつど、画面を見ず黙々と酸辣湯をすすつてい  
る。夏華と向かい合わせに座つてゐる為、そもそもがテレビから背を  
向ける格好なのだが、どちらにせよ彼が食事中、別のことをする  
ところ「」ではない。

普段、これでもかといつくらい荒さが田立つ兄でも、それが家庭  
のことになると一変するのだ。古風な考え方を貫き、そうするよう  
家族に言い聞かせる。一家の長といつのはどにもかしりも、こんな  
ものなのかもしない。

そんな、余計なことを夏華が考へてる内に、いつのまにか画面は  
スタジオを映していた。そこでは、襟元を正したアナウンサーの女  
性が、つらつらと手元に置かれた原稿を読み上げている。

『 のようです。唯一犠牲になつた同電波塔の警備員、室井健人  
さんについてですが、警察の調べによると実は暴力団組織、白道会  
の元組員だつたとの情報が入つてきており、それが今回の東京スカ  
イツリー崩落事件と何らかの関係性があると見て現在

大事な締めの言葉、その直前でピッ、といつ効果音と共に画面が  
真つ黒になる。夏華はリモコンを置いたはずの位置に田を向ける。  
ない。

次に、冬治の方に目を向ける。  
あつた。

誰が肝心の所でテレビを消したか、言つまでもなかつた。

「兄さん。それは、宣戦布告ですね？」

「はあ？」

「まさかこんなことになるなんて……正直失望しました。リモコン  
を奪い合つが、兄妹の常といえども、妹思いの兄さんならきっとし  
ない、そう信じていましたのに」

「十分思つてゐるじゃないか」

「どこがですか？」

その問いに冬治は、信じられない一言を発した。

「だつてテレビ見ながらじや味、分からんだろ？」

普通の答え。真っ当な回答。それでも、夏華は耳を疑つた。

( 中華を、味わつて食べると? )

日々、料理を作ってくれる冬治には感謝している。が、ここ一〇年以上、夏華は中華中心の食生活を強いられてきたのだ。最近でも、通りで「ラーメン」というのぼりを見かけては、地団太を踏んだものだ。それでいて、この中華を味わえなど、夏華にとつては挑発行為以外の何ものでもない。

つまり、やることは一つだった。

「兄さん…………あなたという人はあつ！」

そして、兄妹喧嘩は始められた。

何時間と待たず始められる二人のささいな喧嘩。

当の一人は、暴力行為はないものの、熾烈な舌戦をくり広げている。それは家族ならではの、厳しい言葉の連續。「中華ばかり食べさせるなんて、ありえない……健康管理がなつてないんですよ！ そんなんで保護者顔ですか！」から「そんなんだから、女性にフられるんです！」という意味不明のものまで、様々。

無論、冬治も「食事でのマナーはな、普段やつとかないと、いざつて時にできやしないんだ。困るのはお前なんだぞ！」から「そもそも潔癖症なのが悪い！」という訳分からぬものまで言いだし、引けはとらなかつた。

相変わらずな一人に、毎度の口喧嘩。

それは無駄に見えて実の所、夏華にとつて大切な家族の時間なのであつた。

## 第一章 不確かなる真実（うた）【兄妹で和氣藹々】（後書き）

次回作は、いよいよ本作の日玉でもある歌が絡んでくるので、もしかすると明日に投稿できないかもしれません。頑張りますが仮に何日か遅れてしまったら、申し訳ございません。

## 第一章 不確かなる真実（うた）【歌聴きながらの登校】（前書き）

急いで登校する夏華。自転車に乗りながらも、イヤホンで聞くナンバーはあるの……

## 第一章 不確かなる眞実（うた）【歌聴きながらの登校】

「ほりもうこんな時間になっちゃたじゃないですか兄さんのクソバカ！」

食卓での家族喧嘩といつ、ありきたりなことをしてしまった結果、気付けばもうこんな時間。夏華は玄関で靴を履きながら、踵をトントンしていた。はめた腕時計で時間を確認しながら、出入り口の扉に手をかける。と同時に、

「夏」

声がかけられる。

「何ですか！」

焦つてるせいか、同じテンションで返してしまつ。

「行つてらっしゃい。気をつけて」

それは当たり前の、何てことない決まり」と。夏華はまともに取り合わない。

「はいはーい。行つてきます」

そのままの勢いで玄関を出た。すると、眩しい照り返しに晒され、少しふらついてしまう。カラッとした冬空。雲一つない青空は、今にも吸い込まれそうだった。見上げると一度ツグミが二回、蒼穹に羽ばたいていった。

「寒つ」

室内との温度差に、体を震えてしまう。

夏華は、すぐ側に止められた自転車のスタンド、そのロックを外すと蹴り上げた。後、跨る。

サドルにお尻を乗せると、冷氣のせいか、腰を上げるほどに冷たかった。

これで、出かける準備は整つた。夏華は制服のポケットをまさぐると、その中にある紐状の物を掴み取り出す。イヤホンだった。その先端は、MP3プレーヤーに取り付けられてる。

ペダルを漕ぐと共に、押された再生ボタン。

初めて流れるのは、大好きな兄の歌だった。

今では表舞台で歌われることのなくなった、そんな昔の思い出。

「…………よし！」

そして、夏華の一日が始まった。何が起こるか分からない、だからこそ憂鬱で、だからこそ希望ある、そんな一日が。

チャリラリラーン

それは陽気な旋律 イントロ あの東京スカイツリーで流した曲と、全くの同曲だった。違うのは、歌い手が 夏華 アマチュア でなく、冬治だということ。夏華は、ハンドルを握る指で、小刻みにリズムを取った。そうしたくなるくらいに、キャッチーな音律。

流れる景色は、ついさっきまでとは明らかに違ったのだった。

?始まりの歌 五線譜じや伝わらない ナバーハーフ

でかけましよう 世界を君色に塗り変えてこう？

△メロに、夏華は穏やかな気持ちになつた。澄んだ、人を奮わせるだけの声質。飾らないそれは、磨かれた宝石に似た、円熟度を放つていた。

元気が出る、テンポの良い入り。

暖かな曲想は、冬というよりは、春のうららかを思わせる。そういう意味では、これから季節にぴったりだった。

一方、自転車に乗つた夏華は、歩行者らを追い抜き、坂道を下っていく。住宅に面したそこは、地元の人人がよく使う道だった。一つ、また一つと家々が流れていく。

いつもの光景。

けれども、歌を聞く夏華にとつて、映る光景は一味も、一味も違つた。

道行く人が明るく見え、どんな暗い顔をしたサラリーマンでも、その瞳の奥に宿る強さを見ていた。

並び立つ、何てことないガードレールや、冷たいアスファルトの路面。そんな氣にも留めないものが、一瞬にして煌びやかな花道へと移り変わる。

今日もここから、一日が始まる。

ここからが、一日の始まり。

当たり前すぎて忘れがちな、そういう一步の重みを、歌は気づかせてくれる。

勿論、大袈裟といえば、大袈裟。

けれど、楽しかった。ただ純粹に、歌の世界に浸かってみたい。変な見栄も、意地も恥も脇に置けさえすれば いくらでも世界は、自分色に塗りかえることができる。

? 青空 太陽 どしや降りの心

つらはらの心 精一杯のSOS

響く マイミュージック あなたの痛みに  
贈ります 目一杯の ラブソングを！？

Bメロは、Aメロのテンポに合わせながらも、よりリズミカルなものだつた。段々と盛り上がりしていく、定石のメロディーライン。ただ、夏華は歌を聴いてる最中、急に顔をしかめる。今頃になつてあの、東京スカイツリー崩落事件のことが頭をよぎつたのだ。取り返しのつかないことをした。そのことへの罪悪感は拭えない。が、それとは関係なく歌われる詞うたが、夏華の心を揺さぶつていく。そこに込められた真心は、より人を高揚させ、浮き足立たすだけの魅力で溢れていた。

サビ前の伴奏で、ドラムの打音が強くなつていぐ。それに合わせ、ギターやベースを含めた音の総和が、一気に耳へ押し寄せてきた。否応なく、聞き手のボルテージは高められる。

いつしか夏華は、罪の意識など、どこか隅の方に追いやってしま

つていた。

勿論、仮初めといえば、仮初め。

歌が終われば、また現実に戻り、罪悪感に苛まれることになるのは分かつていて。それでも、忘れられた。赦されていた。

この一時ばかりは確かに、夏華は救われていたのだった。  
？真っ逆さまに落ちた あなたを救うための フレーズ

響かせるよ

どんな遠くからでも 届かない声にも フレーズ  
届いてるかな

あなたが幸せでも 不幸せでも どんな君でも僕は待ってるから  
嬉しくなつたら 苦しくなつたら いつでもおいで

聴きにおいてよ あなたが選ぶ十八番を？  
（メロ）（サビ）は、流れるようにしたためられた調子だった。勢

いが感じられるそれは、これからを祝福する、そんな後押しが込め  
られている。

ともすれば、今の心境にぴったりの詞。

慰めになればと、選んだ曲。

それが、自分の心にどう響いたかは、上手く説明できない。

変わったことといつたら、漕ぐペダルの回りが知らず速められた  
ことくらい。

気づけば、坂道は平坦な道へと切り替わっていた。後は、うねる  
ように舗道を蛇行し、いつもの上り坂を越えれば、そこではもう学  
校が見えてくる。

とはいって、それまでに待ち受けているのは、真冬の厳しさ。歌を  
聴き入つてたら寒さを忘れました、なんて都合の良いことは起こらない。  
現に、手袋を付け忘れた夏華の手は、寒風で痛いくらいに凍  
えていた。耳回りもこの寒さで真っ赤になり、堪えきれず手で擦つ  
たほど。

けれど。

けれども、歌を聴いてると何故か、逃げたくなるような世界は、  
その寒ささえ、その痛みさえも嫌いになれない世界へと、印象を変  
えていったのだった。

## 第一章 不確かなる真実（うた）【歌聴きながらの登校】（後書き）

詞に手間取つて、何日か遅れてしまい申し訳ございません。次回作は近日中に投稿したいと思っております。

## 第一章 不確かなる真実（うた）【学校に到着】（前書き）

よつやく、学校に到着した夏華。まづやるべからりとは教室に行く  
とじでなく……

## 第一章 不確かなる眞実（うた）【学校に到着】

「おはよーう

「おはよーう

学校に着いた夏華は、自転車を所定の駐輪場に置くと、そこで鉢合わせた顔見知りと声をかけ合っていた。

女学生同士ならではの、歯の浮いた声色。

正直、あまり慣れたものではなかつた。ただ、学校生活を快適に過ごすためには、なくてはならないものもあるので、満面の笑みでこなしていく。

駐輪場のある校舎裏から、ぐるりと回つて表に出ると、そこでは登校する学生でごつた返していた。

（間に合つたあ……）

たくさんの人人がいるおかげで、夏華はホツとしていた。そのまま、その大勢の流れに混じつて校内へと入る。下駄箱に辿り着くと、靴からなのか、そこ特有の何とも言えない匂いが鼻についた。

下駄箱は左から一年生、二年生、三年生の順に区分けされている。夏華は高校一年生なので、真ん中を突き進んだ。周りを見ると心なしか、急いでる人がちらほら見受けられる。まだ時間はあるが安全を期したい、そんな微妙な頃合なのだろう。

人に流されやすい性格なのか、何だか夏華も焦つてきた。自分の下駄箱から上履きを取りだすといい加減に履き、まずは三階を目指す。ちなみに、ここは三階建てで、三階から一年生、一年生、三年生の順に階を下がつしていく形をとつていた。と、いうことは夏華が本来向かうべきは一階で、三階は一年生の領域である。

けれども、そこに行く理由は、ちゃんと存在していた。渡さなければいけないので。妙に重く、パンパンになつてゐる学生鞄の中にあるものを。あの弟に。

従つて夏華は、急いで階段を駆け上がつていったのだった。

「　　い　　ない、　　で　　す　　つ　　て　　え　　……？」

三階といづ、いつもより多い段差を駆け上がってきた夏華。澄ました顔して、息切れしている。が、時間は待ってくれないので、彼がいるであろう教室で、恥ずかしながらそのクラスメイトを呼んだのだ。そして、呼び出してくれるよう頼んだのだが、当の本人はまだ来ていないとのこと。

そもそも下級生ばかりの所に、ぽつんといいる上級生というだけで、辱めを受けてるも同然だった。登校中のドタバタがあつてか、実際はさほど注目されてないが、夏華自身は顔を真っ赤にさせている。

（あんのおバカ）

怒りの矛先は、まっすぐ弟に向いていた。

夏華は今度、階段を駆け下りていく。長年の付き合いからか、大体の居場所は分かつていて。とはい、ゆっくりなどしていられない。何せ、階を上がつてくる学生らの雰囲気が、危機迫るものなのだ。「どけどけどけえ！」とでも言つてゐかのよくな瞳で、突つ込んでくる男子学生すらいる。

もう、時間がない。

夏華は、最悪の事態を想像しながらも、足を走らした。一階 そのパソコン室へと。

後によしよ。そう何度も思うが、どつにも踏み切れない。

実際、遅刻などしたことのない自ら。では、そのこだわりを捨ててでも渡さなければならぬ物なのか、と問われればそうでもない。そうでもないのだが結局の所、一階まで来てしまつてゐる夏華なのであつた。

校内に、無情の鐘が鳴り響く。

夏華はとりあえず弟を引っ叩き、そつ心に誓つていた。

パソコンの座前まで歩くと、その扉を開き中へと入る。

(……いた)

案の定、彼 加藤千己かとう せんじはそこにいた。ずらつと並ぶ数十のパソコン、その内の一つに座っている。入ってきたこちらを気にもせず、勝手に電源を入れたであろう、パソコンの画面を見ていた。打たれるキーボードのかちやかちやした音が、静まり返った空間にはよく響く。

夏華は、一旦散に千己の元へと向かった。彼は一年生だが、とてもそろは見えない小柄な体型をしている。そのことは彼もコンプレックスに思つてゐるようで、弄るところでもかとこうくらい怒る。ただ、その形姿に合つた可愛らしに顔つきをしてるので、夏華はむしろ、背がちつちやくて良かつたなと思つていた。よく、反射的に抱き締めたくなるのだ。そんな時、手が届く高さにあるところのま、とても素晴らしいこと。

とはいへ、今の千己は何か違つた。

まるで、時代劇に出てくる悪代官のよつた下卑た笑みで、口角を釣り上がらせてはニヤニヤしている。彼はいつもかけてる黒縁眼鏡を、手で少し持ち上げて、下した。その仕草もキザっぽい。

とにかく気持ち悪いので、夏華は千己の近くまで行くと、とりあえず引つ呪いた。

「どへええ！？」

コアクション

普通、呪かれた人がおよそ言わないであろう反応をする彼。姉は、弟の将来が心配だった。

「アンタねえ……そういう厨二クーラー的な所、どうにかなさい。それより何やつてんのよ、チコチコ！」

「チコチコ言うな！ ウインカーか俺は。つて何だ、夏か」

もう一発引つ呪いた。

「ぎやぴこー！」

「言つか！」

思わず、シッ！！」としまつ夏華。

「何がだ！ て、いか何しやがる！」

「姉さんと呼びなさい。後、田上の人に対しては敬語。親しき仲にも礼儀あり、でしょ？」

「出たよ潔癖症<sup>けっぴ</sup>」

まるで、アメリカ人ばりに両手を肩の所に上げ、横に動かしやつテラレナイヨを表現する。その、ひらひらさせた掌を夏華は掴むと、軽く関節技を決めたのだった。

途端、千己が泣きべそをかく。

「……たく」

どうにも、姉の前では甘えがちな性格が出てしまつようだった。

夏華は、痛めた千己の手を撫でると、抱き締める。

「ちゅうりいな」

一瞬、彼の口から、聞き捨てならない腹黒さを耳にした気がした。が、母性本能をくすぐられた夏華は、姉っぽいことをしたくてならない。なので今のは、特にお咎めなしに

「臭い」

というか、そんなことより、千己の体臭の方が気になつていた。少しきつめのそれは、友達には分からぬが身内には分かる、そんな微かな臭い。

夏華は注意せずにはいられなかつた。

「アンタ、昨日お風呂に入らなかつたでしょ？ 体を不潔にしてると、女の子にモテないわよ。それに学生服も皺くちゃ

「三次元らしいもの言いだな。結構。俺の生きる一次元じゃあ、そんなん『弟くんの匂いがする。えへへ』で済ませちまうんだなこれが！」

「今日はきみんと、家に帰つてきなさいよ。昨日のは私から兄さんに、ちゃんと理由付けといったけど、今日も帰つてこなかつたらアンタ……無断外泊つてことになるからね

夏華は、千己の相手はせずに用件だけ伝える。そして、鞄を開け取り出した。紺色のお弁当を。

「出たな中華弁当！」

「こちこちつるさい。もつ

夏華は、彼の妙なテンションに辟易しながらも、どうしてか同情していた。中華づくしに苦しめられてきたのは、何も夏華だけではないのだ。

「ここまできたら、色々と諦められるでしょ？　はい。後これ

もう一つ、小さめで円錐状のタッパを、その弁当の上に置く。その際、何かタブンといった水音がした。小脇には、レンゲ。

「おい今タブンって言つたぞ！　タブンて！」

「だから……デザートよ」

「な訳あるか！　ていうかアレでしょー。アレなんでしょー。弁当にあるまじきアレやつちやつたつてことだよね！　あのビチャビチヤでニコルニコルの」

「ひいっー？」

一人して、身震いしてしまった。条件反射の賜物。だが、夏華は仮にも姉である。なので、できるだけ千己を落ちつかせられるよう、努めて優しく語りかけた。

「安心なさい。麵は伸びるでしょけど、味は保証できる。お昼休みになつてからだつて傷んだりはしないでしょーう……周りなんて気にしないで啜れば」

「俺にそんな勇気はねえ！」

夏華にも、そんな勇気はなかつた。お昼休みにラーメン弁当なんて、苛めてください、そつクラスメイトに言つてゐるようなものだ。

「私だつて辛いのよ。こんな、朝からなのよ」

込み上げるものをおさえきれず、胸を詰まらせた。すると、千己がその頭を撫でる。お互い、この一言についてせ、ざつやうら気持ちが通じ合つてゐるようだつた。

「俺ら、苦労がぬきねえな」

「ええ……ところでアンタ、パソコンで何やってたの？」  
言いながら夏華は、パソコンの画面を見やる。そこには、有名な  
「チャンネル」と呼ばれるサイトの画面が映っていた。要は、何か提  
示された話題について、色んな人が色んなことを語り合つ、そんな  
感じのものだ。

彼が開いてたブラウザの画面、その左上に表示されていたのは、  
「東京スカイツリー崩落事件」という文字の羅列。

夏華は、中をちょっと覗いてみた。

## 第一章 不確かなる真実（うた）【学校に到着】（後書き）

次回作は、明日を予定しております。

## 第一章 不確かなる真実（うた）【2チャンネル】（前書き）

ちょっとした興味でブラウザを覗く夏華。映っていたのは……

## 第一章 不確かなる眞実（うた）【2チャンネル】

ぶつちやけ、誰の仕業だと思つよ？ 何かニュースじゃ暴力団だの組織ぐるみだの言つてゐるけど実際どうなん？

うへん。何か白道会が絡んでるみたいなこと言つてゐるけど、どうだろうな。だつてあそこ、規模小さくね？ 華道会くらい、でつかな組織ならあのくらい、できても不思議じゃないけど

知つてるか？ 白道会つて実は、華道会からの分派なんだぜ

マジか！？ ジャあ白道会の裏には華道会が糸を引いてて、それで日本を狂氣の沙汰に……ブルブル

ただの暴力団抗争の一種じゃね？

てか、さつきの華道会と白道会の件は釣りだぞ！ くだりみんな騙され

るな！

釣りじゃねえし……てかそんなことして何になるん  
実はやつたの、俺だ。生まれつき、世界を変えられるんだ。言いたいことは？

給料上げてくれ

あのさ、自分だけかもしれんけどこれつてさ、9・11を思い出さね。あの貿易センタービルに突っ込んだヤツ

あー、てことはテロ！？ イラクから！？ いやいや北朝鮮からか！？

いやいや。無知すぎるだろおまこいら。そもそも9・11の貿易セントラービル崩落には、綿密に計算された計画だつたんだよ。人種のつぼとも言うべき多民族国家のアメリカは元々、多くの民族対立や遺恨を抱えている。で、あの広大な領土。何か大きなきつかけでもあれば、そういう問題が一気に噴出して、アメリカって国がバラバラになる恐れすらあつたんだ。そこでテロリスト達が考え出したのが、あの9・11。アメリカの象徴とも言える建物をぶつ壊すこと、国家分裂を図つた。発生直後、街のあちこちに母国の星条

旗が掲げられるのが目立つたりしたのは、その反動 アメリカの危機感の表れつて訳。で、分裂しそうになつた国家を再び一つにする為に、同じ方向を向かせる為にイラク戦争を吹っかけた。それに比べて日本はどうだ？ 多民族じゃないわ、東京スカイツリー最近できたばかりだわ、全然違つじやねえか

はいはい。ま、要はテロと

そそ。テロテロ

待て待て。ヤクザの件はどうなつた？

いやもう何かどれも違くな。そもそもあんなん、人ができる業じやねえつて。何かもつとぶつ飛んだ何かが作用してさあ

神だ

「ななな何でことしやがる！-！」

途端、千己の抗議の声が飛ぶ。気づいたら夏華は、パソコンの電源ボタンを指圧していた。

結果、真っ黒になつたパソコン画面。とはいえ、強制終了させた夏華に負い目など皆無だった。

大体、どのスレが弟のものか分かつてしまつ。それだけに、やっぱり姉は弟の将来が心配でならなかつた。

「こんなくだらない仮想世界とは、早くおさらばなさい。いいわね？ 後、サボるなら最低限の登校日数は守ること。でないと

「でないと？」

「兄さんに知られる」

「……！？」

脅しとしては、十分すぎる言葉だつた。千己は、肛門が縮こまつたといった所だらうか、体を強張らせている。

「ま、私がチクるなんてことはないから、そこは安心なさい。と、いうことで私は授業に出るんで、また後でね」

そう言つて用事を済ませると、夏華はやつと自分のことをすべく、一階への一歩を踏み出したのだった。

校内に、無情の鐘が鳴り響く。

一回目の鐘の音、ということは朝礼が終わり、一時間目の授業が始まつたということ。より、教室に入るのが気まずくなつたのを思い知らされながらも、かといって向かわずにいられない性分の夏華であった。

## 第一章 不確かなる真実（うた）【2チャンネル】（後書き）

次回作は近日中を予定しております。

## 第一章 不確かなる真実（うた）【華道盆と紅道会】（前書き）

下校しよくつくる夏華。だがその前には、黒塗りのアレが……

## 第一章 不確かなる眞実（うた）【華道会と白道会】

夏華は、学校の授業を一時間田の中盤から参加し、残りの授業も無難にこなしていった。途中、お昼休みに「私今日、食堂で食べることにしたの」という嘘をつき、食したあの味は今でも思い出さない。わざわざ屋上という寒空に出たせいで、リップクリームを塗った唇は紫がかってしまったもの。たまたまそこに居合わせた千己の、箸を持つ手は震えていた。冬空の下、思わずそんな彼を抱き咽び泣いたことは、この一家にとって珍しいことではなかった。

こうして、何だかんだで、気づけば放課後。

夏華は再び、下駄箱の所まで来ていた。とはいっても、このまま家路に着く訳でもない。やることがあるのだ。渡さなければいけない。少し軽くなつた、学生鞄の中にあるものを。あの姉に。

夏華はすべきことの為に、靴を履いて校舎を出る。見える風景は登校時の、学生がわんさかいた時とは、ガラリと変わっていたのだった。

黒塗りのベンツが止まっている。校庭　　グラウンドを横切った先、つまりは夏華の目前に。

煌びやかな艶に、美しい曲線のフォルム。  
全長にして、五メートルはあるつか。

ただ、それ以上に夏華が気になつてるのは、タイヤ痕の方。

まるで、その車体でグラウンドをドリフト走行してきたかのように、そこかしこにそれが散見される。土に残るそれらは、ここから部活をしようという人達にとっては、この上ない迷惑行為だつた。よく漫畫などにある、不良が主人公の学校に乗り込んでくるより、たちが悪いように思える。ただ、下校する学生らにとつても、先生らにとつても、これは見慣れた光景なので何も言わない。とい

うか、見て見ぬふりをしていた。が、問題の渦中にいる夏華は、それがしたくてもできない。

（また……）

夏華は、心中穏やかでなかつた。それでも驚かないのは、前例があるから。いとうのが実の所、自身に友達ができるづらい理由でもあつた。

こちらが待つてみせても、どうやら何も起こりそうにない。なのでまずは、いかにも高級そうなベンツ、そのバンパーを蹴り上げてみた。

途端、車のドアが開き、が体の大きいスース姿の男が飛び出でくる。強張つた顔つきで頬には、刃物によるものか、痛々しい裂傷の痕が刻まれていた。厳しいその風貌は、四〇代の齢に合つた、そんな雰囲気を醸しだしている。

その中年男が放つ、渋い一声。

それは、

「お嬢！ 何するんですか！」

およそ現実世界では耳にしない呼びかけだった。おそらくは弟によるものである。

夏華は頭痛でもないのに、頭を抱えた。

「近藤。何ですか、その呼び方は」

「い、いえ。千己坊が、お嬢は本当はそう呼ばれたいんだつて、そう教えていただきまして」

「私はこれまで、そしてこれからも、そんな呼び名に喜びは覚えることはないでしょう。だから、いつも通りの呼び方に戻してください」

「分かりました！ お嬢！」

分かつてないようだつた。

夏華は、困つたように人差し指をおでこに当てるとい、考え込む。

（あんのおバカ。この堅物に何言つた？）

基本的に、近藤という人間は仁義に熱く、義理堅い。なので、言

われたことはバカの一つ覚えみたいに遵守するのだ。が、さつきの言葉には耳を傾けなかつた。こんなこと、普通は考えられない。すると、パシャッと、何かのシャッター音を耳にした。見ると、近藤がこちらに向か写メを撮つてゐる。あまり見ない、といつより初めての光景だった。

「近藤」

名前を呼びながら、睨みつける。

「あ、すみません。けど仕方ないんです。ミッショング……」

「ミッショング?」

さつきの「お嬢」といふ「ミッショング」といふ、何やら「次元の匂いがブンブンする。

夏華は、その写メールを撮つた携帯を、やおら彼からもぞ取ると画面を覗く。

映つていたのは、困り顔をする夏華だつた。

とりあえずはその画面を閉じ、次にメールの受信ボックスを開いてみる。すると、新着で未開封なのがあつた。一件。送り主の欄には「当局」。

読んでみる。打たれていた文面は、非常に簡素なものだつた。

『それが萌え』

夏華は思つ。なるほど、そういうことかと。

次に、開封済みのも読んでみる。すると、

『今回、君に与えられた指令は夏華こと、加藤夏華の送迎。ただ、いつもとは勝手が違う。どこからか敵に、その情報が漏れてしまつたのだ。よつて奴らは、君が停車させる所定の位置に合わせ、狙撃手を忍ばせている恐れがある。なので今回、相手の裏をかき、校内に乗り込むとしよう。無論、車でだ。が、そこも安心できる環境とは言ひがたい。おそらく最大の難関は、グラウンド。最も見晴らしがよく、故に仕掛けられやすい。更に事前探査してもらつた所、その地中にはBAUER24といふ、最新鋭の地雷が至る所に埋められてているとのこと。それは、人が安堵すると爆発するといふ、と

にかく一癖も二癖もある厄介物だ。つまり、君は校庭に入ったら、敵の照準が車体に合わぬよう攪乱させ、且つ下に潜む爆破物を回避しながら進まなければならぬ。とても困難な道のりだ。が、君ならやつてくれる信じている。」ちらからは以上だ』

『夏華の言動には注意せよ。奴は仮にも女子高生キャラ。必然的に、シンデレガについて回る。今更、このことに説明はいるまい？ 嫌と言つたら好き。やめると言つたらやつてくれ。つまりは、嫌よ嫌よも好きの内という設定で、一次元では空氣と同じ扱いを受けている。故に廃れたテンプレだが、そこには鉄板なりの熱き血潮が』

メールの文面にはまだ続きがあつたが、もう十分だつた。何で校庭がアクション映画ばりの惨状になつてているのか、何でこちらが呼び名の訂正を求めて流されたのか、色んなことがよく分かる。（こいつた、てんやわんやを楽しめる場所といつたら……あそこしかないか）

そう思いながら夏華は、学校の屋上を見上げる。と同時に、小さな人影が引っ込んだ。

（もうバレてるつて）

高みの見物と洒落込んだつもりであろうが、姉は何もかもお見通しである。

「近藤。携帯、没収しますね」

「え、ですが、これからその画像を若い衆に高値で売りつけるつていう、実はお嬢が人気者だつていう設定を」

「近藤……あなた、んなダンディな声で何言つてやがりますか。何でもかんでも人の言つこと、丸呑みにしそぎなんです。いいですか。千己の言つことは、全部でたらめです。私の言つことだけを信じなさい。いいですね？」

「え、ですが」

「いいですね？」

「は、はい」

これだけ念押ししたことで、ようやく近藤は夏華の言つことを聞

くよつになる。

「では、まずは呼び名から改めましょう。わあ、いつも通りに呼んで  
ください」 夏ちやんと

「え？ 私、いつもは夏華様と」

「夏ちやんと」

「夏華様」

「夏ちやんとー！」

有無言わさぬ視線で、夏華は近藤の答えを待つ。

言わせたい。何か言わせたいのだ。

対して、彼は一瞬、引きついた顔を見せる。が、すぐに気持ちを改めるように佇まいを正した。

(……言つ気だ)

自分で振ったくせして正直、おつかなびっくりな面持ちの夏華であつた。

そして近藤は、遂にあの言葉を口にする。

あの渋い重低音で。

あのファンシーな名を。

「お母様が待つておられます。行きましょう……」 夏ちやん

「 があつ！」

堪らず、夏華は腹を抱えて、車のボンネットを叩く。

「お止めくださいー！ 夏ちやんー！」

加えて、近藤のダンディズムが追い込みをかける。夏華は堪らなかつた。

「夏ちやん！ 夏ちやん！」

爆笑に、拍車がかかるばかり。むしろ近藤という人間は、わざと言つてるんじゃないかと、そんな悪戯すら邪推してしまつ。

結局の所、姉弟共に、やることは似たり寄つたりなのであつた。

## 第一章 不確かなる真実（うた）【華道盆と紅道会】（後書き）

次回作は短めですので、今日中に連続で出したいと思います。

## 第一章 不確かなる真実（うた）【華道念と紅道会2】（前書き）

謎に包まれていた夏華の家族構成。それらが徐々に明らかになってきて……

## 第一章 不確かなる眞実（うた）【華道会と血道会】

「 ちゃんと校庭を元通りにするとか、後片付けはしてくださいよ。堅気の人には迷惑をかけない。そうですよね？」

車内に乗り込むと同時に、夏華は、運転席に座る近藤を正す。

「 重々承知しております。その点は抜かりなく」

という彼の言葉に、夏華は窓からグラウンドを覗いてみると、せわしなくトンボをかける、厳つい極道の人らが窺えた。いつも銃や薬やらが専売特許な人達。それだけに、やつてることが子供のおままで、滑稽だった。毎度、どこから降つて沸いたんだと思うのだが、この組織の規模から言えば、何があつても不思議ではない。

「 もう言つても無駄だということは分かつますが、近藤。学校にまで押しかけてくるなんてこと、しないで頂きたい。おかげで私は今日も、学校で気まずい思いをしました」

「 それは、誠に心苦しい限りです。ですが、そうであるなら定期的に、お母様にお会いになつてください。でないとまた、こんなことの繰り返しになつてしまします」

「 だつたら、母さんの方が家に来ればいいでしょ？」

「 それ……本気で仰つてるんですか？」

勿論、憎まれ口にすぎなかつた。その理由は単純明快。

もし万が一にも母が家に来て、兄と出くわすものなら、血の雨が降るからだ。それは冗談でも、誇張した表現でもない。事実、そういう過去があるのだ。

とひのつまり、母と兄は犬猿の仲だということ。

というか、夏華が母と会うとこつこと自体すら、ともすれば危ない橋を渡つてることになる。当然、兄はそんなこと知らない。

知らうものなら、家族喧嘩では済まない抗争が起る。本当に、そんなことが起きてしまうのだから、心は休まらない。

夏華の家系、その相関関係はとても複雑なのだ。

そして、そのことは夏華や近藤に限らず、この組織を生きる人間にとつては周知の事柄。つまりは、悩みの種といつことだった。

「にしたつてこのままじゃ、いずれ学校から家に連絡が来ますよ。そしたら必然的に、保護者である兄さんに話が伝わる訳で……どっちにしろ取り返しのつかないことに」

「安心してください。そこはきちんと圧力はかけ むおつ！？」

近藤が素つ頓狂な声を上げる。それもそのはず。夏華が後部座席から、前の運転席を蹴つ飛ばしたのだ。

「何がどうしてそんな脅迫めいたことをしたってんですかええつ！」

「お止めください、夏ちゃん！ 悪ふざけにも程がありますぞ」呼び名のせいなのか、どちらかというと近藤の方がふざけてる気がする。無論、こちらとて、高校一年生にもなつて座席を蹴ることに喜びを覚える、そんな能天気な生き方はしてこなかつた。ちゃんと、それ相応の理由があるのだ。

夏華はちょっと、色々考えてみる。

そういえば、さつきの一時間目、遅刻してきたのに先生から何も言われなかつたなあとか。

そういえばここ最近ずっと、先生の笑顔が妙に痛々しかつたなあとか。

そういえば帰り、教卓に置かれた出席名簿で、自分の所を覗き見したら無遅刻無欠席になつてたなあとか。

こう、振り返つてみると夏華は、思い当たる節がありすぎて逆に困つていた。なので憂さ晴らしにもう三度、同じ所をゲシゲシ蹴る。対する近藤は、反応もバカの一つ覚えみたいに忠実だつた。その三回に呼応するように、

「夏ちゃん！ 夏ちゃん！ 夏ちゃん！」

喧嘩を売つてる そつ感じずにはいられない。

実際、高級車の乗り心地が最悪な夏華だった。

## 第一章 不確かなる眞実（うた）【華道念と紅道会2】（後書き）

次回作は「うちらの都合上、月曜日は厳しいので火曜日以降になります。なるべく近日中を予定しておりますので、よろしくお願ひいたします。

## 第一章 不確かなる真実（うた）【華道念と紅道会3】（前書き）

車を走らせ、母の元へと送られる夏華。しかし、着いた場所は……

## 第一章 不確かなる眞実（うた）【華道会と白道会③】

そうじつしてゐる間にも、ベンツは他の一般車と同じく公道を行っていく。すると、前方の信号が赤になり、道路上に多くの車列が並んだ。明らかに他車と一緒に画すその形は、周りから注目を浴びるには十分だった。前後左右から、車内を窺おうとする奇異の視線を感じる。

夏華は、何も悪いことはしていないといふのに、小さく体を縮こまらせた。何故か、顔を真っ赤にさせていた。

（どうか私、用があるんですけど）

鞄の中に入ったお弁当を、姉に渡さなければならぬのだ。冬といつ季節性もあってか、食材が傷むことはないだろうが、それでも早く渡すにこしたことはない。ただ、文句を言おうにもその相手は、一度言いだしたら聞かない性分。夏華自身、近藤については重々承知しているので、何も言ひようがなかつた。

とはいへ、別に母と会うことには抵抗はない。むしろ母のことは大好きだし、毎日会えるものなら会つていい。そもそも家族して、てんてんバラバラなのがおかしいのだ。けど、そんなことを口にしようものなら、兄が悲しむ。露骨に辛そうな顔をさせてしまう。それだけはさせたくないのに、けど、どうしてなのが分からなくて……結局、無知で無力な自らは、何もできなかつた。

今までは。

（ 　ん？ ）

制服のポケットから、何やら振動を感じる。携帯のバイブレーション。さつき近藤から取り上げた物ではなく、自分のからだつた。夏華が、ポケットからそれを取り出す頃には、震えは止まっている。その短さからいつて、メールの着信。

夏華は、携帯画面から受信ボックスを開く。すると、新着メールが一件、届いていた。開いてみる。

『助けてほしいか？』

送り主の欄には「チコチコ」。弟からだつた。傲慢なその文面は、屋上から人を見下したテンションそのままに送つたといった所だろう。

とはいへ、かくも女性というのは、偉そうな人が嫌いなもの。なので当の夏華は、返信しなかつた。

すると、携帯がバイブする。ついさっきと変わらずの、着信メー

ル。

夏華は、再度同じ動作を繰り返し、それを開いてみた。

『助けてほしいですか？』

敬語になつていた。弟思いの姉としては、思わずクスリとしてしまつ。きっとメールを送つた後に、反省したのだろう。こちらが返信しなかつたというのもあるが、それ以上に千尋は心配症なのだ。

普通なら「めんどくせえ奴」という括りの下、切つて捨てられる所だが、そこは家族。

夏華は、彼が好きそうな文面を思案しつつ、指を走らせ文字を打つていつた。結果、できた完成形がこれ。

『助けて。弟君』

送信した。すかさず返信される。

『音声メッセージでよろ』

という文字と共に、添付ファイルがあつた。何やら見たことない、文字の羅列。開いてみると、その文字を選択し決定ボタンを押し込む。

途端、タッチパネル画面いつぱいにコンテンサマイクが現れた。その画面下には、横棒のゲージが周りの音量に合わせ、上がつたり下がつたりしている。となるとこのゲージはボリュームにあたり、送話口から音を取つてるのであらう。

（声を吹き込めること…）

添付ファイルの使い勝手が、分からぬ夏華だった。おそらくは千尋自作のアプリ。

何を隠そう、彼は機械関係にめっぽう強くてアプリに限らず、ブラックボックスとも揶揄されるパソコンの性能もいかんなく発揮させられるのだ。が、それが時には行き過ぎて一時、取り返しのつかないことになったことがある。本人曰く、反抗期だったとのことだが、そんな言葉では済ませられない大惨事だったのだ。

オタク文化を規制する東京都庁にサイバー攻撃を仕掛けたり、ホームページ検索で「中華」と打つて出てきたページにウイルスをばら撒いたり、週間オリコンランキングの一位から一〇位までを全てアニソンに置き換えるというハッカー紛いの児戯じぎまであつたというのだから、警察沙汰だった。

それと比べるにつけ、今の千鶴は大人しくなつたものだ。おかげで家族の心労は軽減された訳だが、代わりにそのツケがこちらに回つてくるというのだから、ままならない。

とりあえず夏華は、携帯の送話口に声を吹き込んでみた。

「タスケテ。オトウトクン」

抑揚も声量もない、言葉の羅列。外国人口調の如きそれは、感情が全くこもつてなかつた。

すると、まだ何も操作してないのに、画面に「メール送信中」との文字が映し出される。声が吹きこまれたら送信されるよう、設定が施されていたのだ。

少しの間、夏華が手持ち無沙汰で待つていると、画面に「メール受信中」との文字が浮かび上がる。それに合わせ携帯を弄ると、新規メールを開いた。

「あれ？」

そこで夏華は戸惑う。文面がないのだ。あるのは添付ファイルだけ。開いてみる。

途端、またしても画面いっぱいに何かが展開した。と、いつても今は千鶴のオリジナルではなく、youtubeなどにありがちな動画からの引用。どうやら、アニメのようだった。勿論、それがどのアニメか特定できる

ほど、夏華は一次元に精通していない。なので、ちんぶんかんぶんな面持ちで、ただぼーっとしていた。

視線の先では、萌えキャラと思しき女が絶対絶命の危機に陥つて。少女漫画に出てきそうなビックリおめめに、お姉さん風の顔立ち。そして、彼女が見つめる先、悪役（怪獣）を隔てた奥には、千己に瓜二つの少年が……

（ 嫌な予感がする）

夏華による一抹の不安をよそに、画面上の三役は、勝手にクライマックスを築いていく。

ヒロインであろう女が、少年を見ながら大粒の涙を垂らした。こちらの情報不足もあってか、全くもって感情移入できないが、それでも言うであらう台詞が分かつてしまつたのだから、不幸極まりない。そして、女は叫ぶ。目一杯に叫ぶ。おぞましい萌えボイスで、あの台詞を。

「助けてええ！！ 弟きゅうう」

絶叫の最中、それは消えた。

というか夏華が電源ボタンをこれでもかと押し、画面<sup>ヒロ</sup>と消し去つた。結果、電源の切れた携帯。思うことは一つだつた。

（……アイツめんどくせえ）

せつかく改心したと思ってメールを返したというのに、終いにはあんな言い方まで強要するという偏愛ぶり。千己は恩を仇で返す変態だった。おまけに車内に変な声が響き渡つたせいで、夏華は変な羞恥プレイを味わわされる始末。

すると、そんな雰囲気を気遣つてか、近藤が声をかけてきた。

「大丈夫ですか？ 夏ちゃん」

「これ以上、私を辱めてどうしようつたんですか？」

「はい？」

「あ、いえ」

遊び心で決めた呼び名に、逆に弄ばれるという夏華。

「あの、気にしないでください。ちよつと弟の残念な嗜好に打ちひしがれただけ つてあれ？」

話しかけられ、顔を上げてる内に気が回らなかつたよう

車が停まつていた。

長らく携帯と睨めつこしてたせいで、他に気が回らなかつたようだ。

「ええ。着きましたよ」

まだ状況を上手く把握できぬ夏華に、近藤は言つて聞かせる。

「そうでしたか。着くの、意外に早かったです」

いつもとは違う体感での到着に、少しばかり呆気にとられていた。すると、そんな夏華の耳に「ンンン」と、窓を叩く音が入つてくる。振り向くとそこには、

「 母さん！」

窓越しに映る、優しげな微笑を向ける女性に思わず大声を上げる。過剰に反応してしまつたのは、嬉しかつたから。何せ一月ぶりの再会である。

五〇の大台をとうに越えてる母はここ最近、老け込みが目立つようになつていた。単にたまにしか顔を合わせていないからそう感じるというのもあるが、それだけでない焦燥感というか、疲労が顔に滲みでてゐる。彼女の立場からすれば、必然と言つておかしくない兆候であろう。けど、与える影響は何も悪いことばかりでもない。

本来であれば「もう後は死ぬだけよ」なんて達観した生き方をする齡だといつのに、母の瞳は未だに生気が宿り、ギラついてゐる。加えて、白髪であるはずの長髪を黒色に染め、小奇麗に束ねることで若々しさが醸しだされていた。風貌は、傍から見ると近寄りがたい威厳を放つてゐるが、それもまた彼女の重責のこと。

夏華は、車の扉を開けると外に飛び出した。そのまま、一目散に母へと抱きつく。一方、彼女の方も両手を広げ、受け入れる格好で抱き返した。そして、愛しむように娘の髪を撫でていく。

「元気についてたか？ 怪我は？ 食事はちゃんと良い物を食べて

いるか？」

「はい。怪我もなく、元気にやっています」

親の心配に夏華は答えていく。さすがに最後の質問はスルーしたが、かといって酷い食生活を強いられてる訳でもなし……毎日、お弁当も含め三食、手料理を振舞ってくれるのだから、その点だけ見ればむしろ健全だった。

「母さんの方は？」

言つて、今度は夏華が母の心配をする。間近で見る彼女の顔。少し頬がこけたであろうか。もう随分な齢だし、無病息災でいることが方が稀だ。

「もしかして、何かの病気にかかって」

「こおら、夏。勝手に私を病人扱いするな。今だつてほれ、この通りピンピンしておる」

「本当ですか？」

「本当よ。あ、それはそつと、夏。話は変わるがな」

「会長」

親子の会話を割つて入る、渋い男声。いつの間に外に出たのやら、近藤によるものだった。

「分かつてある。今言おうとしてた所よ」

「会長」と呼ばれた母が、近藤の声に応える。

「そうでしたか。申し訳ございません。無粋な真似を」

「いや。お前の心配は重々承知している。さすがにこんな所で立ち話など、正気の沙汰でないわな」

そう話す一人の会話を聞いてて、夏華は不思議に思つ。

（こんな所？ 何で実家をそんな他人行儀な口ぶりで……）

と思つた所で、辺りを見渡してみる。

ここは、高層ビル群の一部として屹立する建物だった。近代建築の極みを骨の髓までしゃぶったかのような意匠が、至る所に凝らされている。下へ目を向けると大理石の床があり、左へ目を向けると、豪邸にありがちな円形の噴水が水飛沫を上げ、小さな虹を創つてい

た。

最後に、右へ田を向けるとあつたのは、そびえ立つといつ表現がピッタリな丸型の巨大ビルディング。時が夕刻ということもあつて、茜色に染まつたガラス窓の照り返しは弱く、おかげでその幻想的な美しさを直視できていた。

夏華はこの光景に見覚えがある。だから、ここがどんな所か知っている。だから、とんでもなくおつたまげた。

「つてここは白道会の總本山じゃないですか！？」

たじろぐ夏華に、他の二人は動じない。

どう考へてもおかしかつた。

ここは夏華の実家ではなく、白道会がその基盤を置いているビル。そして白道会とは、東関東最大の暴力団組織 華道会との対決姿勢を鮮明に打ち出している暴力団であり、つまりは、

「いやいやいや！ どちらかといつと一人の方が冷静でいられないのでは？ だつて二人は」

「だから、さつきの話に戻るのだがな、夏」  
言つて母が、夏華の喋りに割つて入る。

そして、告げた。これまたとんでもない無理難題を。

「私の力になつてくれないか？ この華道会と、白道会の架け橋に」  
つまりは、かどうはな 華道花 夏華の母は親であると同時に、華道会を牛耳る長でもあつたのだつた。

## 第一章 不確かな真実（うた）【華道盆と紅道盆】（後書き）

投稿が遅れてしまい、申し訳ございません。キリのいい所がなくて、中々の長文になってしましました。

次回作は、近日中を予定しております。

## 第一章 不確かなる真実（うた）【華道念と白道会4】（前書き）

白道会の総本山である、丸ビルに乗り込む夏華達。その最上階には  
あの人気が待つていて……

最近のHレベーターといつもののは、よくできている。

昔はガタンゴトンと、駆動音がしたものだが、夏華達一行の乗つたそれは静かだった。更には、外が見渡せるガラス張り仕様だった為、景色を満喫できるというサービス付き。ただ、底も含め四方八方が透明なのは、利用者によつては、恐怖のアトラクションに様変わりする危険性も孕んでいた。

夏華達三人が乗る上りエスカレーターは、あつと「う間に五階一〇階と、階を通り越していく。重力がかからないよう巧みに設計されたであろうが、それでも下に押し付ける圧力が、三人に降りかかつた。微々たるものだが、確かに力。だというのに、当の夏華は微動だにしなかつた。

「どうか、それどうじやなかつた。

（何でこんなことに何でこんなことに何でこんなことに何でこんなことに……）

自分の世界に引き籠もり、同じ疑問をループさせている。心の病み方が尋常でなかつた。現実逃避とでも言つていいのかもしない。できるだけ後方に入る一人は見ないようにしている。そうすることで、少しでもここに居ることを忘れていたかった。

とはいへ、このままではいけないとも思つてしまつ白ら。その、どこかに潜むちつぽけな良心が、状況を整理させていた。

（現在、白道会の本拠地に華道会の重鎮らがやつて来てる。で、白道会と華道会といつたら水と油くらいの敵対関係。これら二つから導き出される結論は？）

抗争、そんな言葉しか思い浮かばなかつた。ならばと対抗策を練るつにも、この丸ビルに入つた瞬間から、そんなこと考えようがないくらい切羽詰つてゐる。だだつ広いエントランスを一步踏み込んだ途端、「ああん！？」だの「てめええ！」だの罵声が飛び、強

面の男達に飛びかかられてた。無論、一女子高生を襲うなんてことはなかつたが、殴られそうになる母を見る娘というのは、精神衛生上非常にようしなくない。

即ち、ちょっとした抗争なら既に始まつていたのだ。

「近藤。最近のお前はたるんである。仮にも若頭なら、日々の鍛錬を怠るでない。動きが鈍くて、目も当てられなかつたぞ」

「申し訳ございません。もう現場を退いて、五年以上は経つので」母と近藤が、何てことない会話をする。その彼のスーツは、おびただしい量の返り血で赤黒くなつていて。何せ迫つてくる白道会の組員を、丸ごとのしてきたのだ。正直、五人くらいまでなら数えられたが、それ以降はあまりの壮絶さに悲鳴ばかり上げていた。

おかげで、今の夏華はみつともないくらいにげつそりし、声はガラガラに嗄れている。

そんな、ぐつたりした人間が考へることといつたら、やつぱり愚痴だつた。

「何でこんなことに何でこんなことに何でこんなことに何でこんなことに……」というか私、ピチピチの『セブンティーン』の『ウケルー』とか『ホントにー?』とかガールズトークで盛り上がつていいお年頃！ 友達いないけど。先生に怒られるつて分かつてもスカートの丈折つたりして、膝上まで見せちゃう悪い女子なの！ 怒られたことないけど。大体血つて何血つて！ 血飛沫浴びる『テナント』の女子つて、どんだけハードボイルドだよー 言つほど浴びてないけど」

心の中だけで呴いてるつもりが、知らず口に出てしまつていて。精神の不安定ぶりが、如実に表れていた。何か後方で「くうつ！」といった、夏華を哀れむかのような男の涙声を聞こえる。こいつの方が泣きたいぐらいだった。

ついさつきの反省も踏まえ、今度こそ頭の中だけで思考を留める。（そもそも一人だけで白道会に乗り込むってどゆこと？ 無謀もいとこだし、向こうに殴つてくれと言つてるようなも。今回は、

たまたま人気がなかつたから良かつたものの、もし普通の人だかりがあつたら、いくら近藤とて無事では済まなかつたはずよ）刹那、エレベーターが停止し、夏華のうだうだも途切れた。見上げてみる。階は最上階である「二〇」を示していた。前方の扉が開く。

「さて、行くぞ」

華道花が、先頭を切つて前に出る。釣られるよつて、近藤も出た。片や夏華は、ここで一階のボタンを押してエレベーターを閉める幸せを考えていたが、行動に移せるだけ勇気は持ち合わせていかつた。

従つて、嫌々ながら前に出る。

この階層は一本道だつた。三人は、赤のカーペットで敷きつめられた廊下を、ゆつくりとした足取りで進みゆく。途中、所々に設えられた照明器具は、通行者の歩みに合わせ光るセンサー式だつた。加えて、放つ輝きは高級感を煽る、厳かなもの。

周りの雰囲気に当てられたのか、夏華の表情は自然と引き締まつたものになる。とはいへ、普段ここに来る時は、こんな緊迫した面持ちになどなりはしなかつた。となるとやはり元凶は、前方の二人。

夏華が思つことは一つだつた。

（姉さん、きつと怒るだろうなあ……）

自然と、鞄を抱き込む両腕に力がこもる。それもそのはず。

元々下校した後、ここに足を運ぶ予定だつたのだ。が、よもやこんな形での姉に会おうとは思つてもみなかつた。

横幅のある回廊は、徐々にそのうねりを減らしていく。そして終に、突き当たりを迎えたのだつた。

視界の先に佇むのは、木製に似せた両扉。

実は自動開閉式であるそれは、差し詰め様式美といった所である

う。

(あれ?)

夏華は不思議に思った。それは、普段と違っていたから。いつもならあの扉の両脇には大柄のガードマンが一人、張り付いてるはずだというのに現状、誰もいなかつた。

(何で?)

「やはりか」

そうほやく母は、まるで何もかも見通してゐるかのようだつた。

「母さん。やはりつて」

「夏。それはいいから、とりあえず先に入つておくれ。私からだと、何かと厄介になるから」

夏華の訊きたそうな空氣は無碍にして、母は本題に入つていく。一方、こちらとしては気にならないでもなかつたが、あえて踏み込むほど野暮なことはしたくなかった。

故に夏華は、足並みを緩めた一人に代わつて前へと出る。両扉の近くまで行くと、ウイーンという機械音と共に、扉が開かれた。その最奥では、馴染みのあの人人が、黒革のソファーベッドに座つて電話をしている。

齡は、二八歳。セミロングの髪を少しカールさせることが、愛らしさを演出している。それは強気で、どちらかといふと男勝りな顔つきとはギャップがあり、だからこそ魅力的だった。細身の体にはシミ一つなく、すらりとした脚には、自然と目がいつてしまふ美しさがある。

可愛いというよりは格好いい。

可愛いというよりは綺麗。

女っぽいというよりは男っぽい。

というか、

(うつわー。やつぱそつくり)

今朝、兄と一夜を共にした女性の外見と、全くと言つてこいほど遜色がなかつた。

そんな姉 加藤美麗が、電話越し発する音声。  
初めに聞こえてきたのは、罵詈雑言だった。

## 第一章 不確かなる眞実（うた）【華道念と紅道会4】（後書き）

次回作は、近日中を予定しております。

## 第一章 不確かなる真実（うた）【華道念と白道会5】（前書き）

白道会が拠点を置く丸ビル、その最上階に来た夏華一行。突き当たる部屋に入ると、そこには姉のイライラした姿があった。初めに耳にしたのは、誰かとの口論の様子。それは……

## 第一章 不確かなる眞実（うた）【華道会と白道会5】

「だからウチは関係ないって言つてんでしょうが！！　んなしつこいんなら奴さん、確たる証拠出せつてーの！　こちとら朝から、ウチの者達を出張らせてそれどころじゃないんですね。ええ……任意同行？　なら正式に逮捕状を取つたら、またおかげ直しぐださい。それでは！」

ありつたけの皮肉を込め、姉は電話を切る。

「警察からか？　近いうちに、ガサも入るんじやないかの」

その仕草に、声をかけるべきでない人が先手を打つた。

喋りかけたのは、華道会の親玉。

夏華はただただ、天を仰ぐ。

（てか私という緩衝材は！？）

先頭に立つてゐるといふのに、でくのぼうな自ら。

そもそも場の雰囲気を和らげる為、第一声は託されたとばかり思つていた。夏華が間に入ることで、少しでも双方がいがみ合わぬよう、火花を散らさぬよう心配り。少なくとも、その意図はあつたはずなのだ。なぜなら、この丸ビルに入る直前、母は「華道会と白道会の架け橋になつてくれ」といつた趣旨の発言をしてきたのだから。

しかしながら、蓋を開けてみればこんな顛末。

先走りしやすい母の発言で、自分の立場は台無しになつていた。

後、夏華ができることといつたら、所在無さげに俯くくらいなもの。

（私の存在意義つて一体……）

だつたらどうして巻き込んだ！　と嘆かずにはいられない。が、そんなことお構いなしに、局面は張り詰めたものになつていつた。姉を見ると、下を向いている。その背後からはどうしてか、焰の如き激怒と大蛇の如き殺意が迸つてゐるよう感じられた。不可視で

あるはずのそれらは、五感として捉えようがないはず。これは目の錯覚、もしくは自身の情緒不安定からくる強迫観念に違いないと、そう結論付けていた。でないと、やつていけそうにない。

「あらあら。これはこれは……今日は珍客が多いこと多いこと。テレビなんて見る暇さえなかつたけど、きっと今日の運勢は最悪ね」姉がこちらには視線を向わさず、冷戦の口火を切る。

「それは嘘よな。今日び、ニュースを賑わして東京スカイツリー崩落事件。それとの兼ね合いでお前さんとこの白道会は、引っ張りだこだつていうじゃないか？ 羨ましい限りだ。会長」

「お褒めに預かり光榮です。それに、何かとウチの者とも遊んでくれたみたいで」

と言いながら、近藤に手を向ける。途端、彼の全身がビクンと波打つた。

（恐ろしい。恐ろしそぎる）

あの近藤をもつて、あの反応。リアクション蛇に睨まれた蛙といった所だらう。

同じ力モられる側の夏華にとつては、とても他人事ではない。

「それより、座つてもいいかね。老体に立ち姿はきついでの」

「冗談。お帰りを」

そう口にしながら、不気味な笑みを浮かべる姉。対する母も母で、笑顔を作つたまま歩みを進めると、彼女の向かいに鎮座する黒色のソファーベッド、その膨らみに腰掛けた。結果、対面する形になる姉と母。

建前と云う名の仮面を被つた殴り合には、ここからが本番のようだつた。

とりあえず夏華は、ここでじつとしていても埒が明かないので、渦中の一人がいる所まで歩いていく。近藤も右に同じくといった様子で、そそくさと同じ拳動を見せていた。

ここは東京都心に拠点を置く、白道会の会長室。

姉の好みからか、内装は白と黒を基調にした、シックな<sup>あつら</sup>謎えだつた。目に付く物といつたら本棚に机、他には接待用のソファーが一

対あるだけ。

そんな質素さが田立つ一角で、激しく燃え盛る一人の鍔迫り合いが佳境を迎えていた。

「にしても、これまた大それたことになつたわいね。今じゃどこのかしこも、この話題で持ちきりよ」

「生憎と、そんな無駄話ができるほど暇はないんでね。単刀直入とこきましよう。丸ビルにまで乗り込んできた用件は？」

「……何が狙いよ？」

「いやはや、東日本を統べる方とは、およそ見受けられない洞察眼ですね。白道会がやつたと、そういう見立てですか？」

「それ以外なかろう。消去法よ」

「ならば、そちら以外考えられないのではないかと」「何だと」

母は威圧しながらも、訝しげな表情をする。

「腹の探し合いなんて、する必要すらないのでは？」だつてそうでも  
「よう？ 塔をぶつた切るなんてありえないこと、歌族の血統にあ  
る貴方以外、誰ができるつていうんですか」

「私がやつたと？ 何の為に？ あんなモタレ（三下やくざ）一匹を消すのに、わざわざ大仰なことはするまい。」おとい「いつか、私の血筋を受け継いでる者は他にもいる。お前があの冬治をそそのかしてやつた そうではないのか？」

「あの男、ですか。自分の息子に対して、随分な言いようだ」

「奴はもう、華道家から勘当された身。私の子は夏だけよ」

「なるほど。ですが、彼の性格はよくお知りのはず。アイツが、歌を人殺しの道具に使うなんて、まかり間違つてもありえません」

「だから言つておる。お前が、そそのかしたんだと」

「これでは堂々巡りですね。まともな議論ができるうにない」

「壮絶な舌戦は、じわじわと相手を追い込む、そんな女ならではのねちっこさがあつた。

（歌族、か。やつぱりそこに行き着くのね）

一人のやり取りを聞きながらに夏華は、この血族について少しばかり考えさせられていた。

歌族とは、古くから華道家に脈々と受け継がれる、特殊な血統を持つ家系のこと。それは歌うことで、そこに込められた詞を現実に反映させられるという、異能が揮える家族だった。

即ち、その力はあまりにも人外で且つ、持て余すもの。

現に夏華が真つ二つにした東京スカイツリーも、その異能によるものだった。それだけの凶悪さ故、幼い頃から歌うことは、いけないことだと教えられてきた。殊今に至つても、歌うことは学校も含め、決してしてはいけないことだと厳しく戒められている。

「歌族というのはな、部外者が一朝一夕で理解できるようなものではないのだよ。古よりその家だけに受け継がれる、由緒ある血統故の、撻と枷。それらなぞ、お主の与り知るところではあるまい？」軽はずみな発言はやめなされ

と蔑む母に対し、姉の切り返しは博識だった。

「『撻』というのは、決められた齢までは歌つてはいけないとする決まりでしょうね。現代では、その境目が二〇歳に上げられてること。で、『枷』というのは申刻の縛のことでしょう。確かあれが発動するのは、異能を使ってから一日後。と、なると、あの縛りに苦しめられるのは、明日の午後四時にあたる。あ、でも、冷酷非道なあなたには関係ない話でしたね。御免あそばせ」

二人の対話は、段々と内輪のみぞ知る世界へと、様相を変えていく。聞き手に回つてゐる夏華としては、何を言つてゐるかさっぱりだった。

## 第一章 不確かなる真実（うた）【華道会と白道会5】（後書き）

次回作は、来週の水曜日以降となります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9099w/>

---

歌の力～混沌に咲く絆（はな）～

2011年10月10日03時23分発行